

毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない

司祭 シモン 林 永寅

先主日に引き続き今日ご一緒に読んだ福音書の喩えもイエス様がその意味を説明してくださっていますから容易く理解できると思います。けれども、もうちょっと考えてみると、分かるようで分からないようなところもあります。果たしてこの喩えはどういう意味でしょうか。もう一度この喩えをよく見てみましょう。

農夫が畑に麦の良い種を蒔きました。ところで、時間が経つにつれて、麦の中に毒麦の芽が出ていました。毒麦は最初見た目に普通の麦とあまり区別できません。けれども、毒麦は食べられません。食べると激しい嘔吐と下痢、めまいが起こります。それで僕が主人にどうしてなのかを尋ねました。主人は、悪魔が畑に毒麦の種を蒔いたからだと教えてくれました。すると僕は毒麦を抜き集めておくと言います。忠実な僕です。しかし、主人は僕を引き止めました。なぜ主人は僕を引き止めたのでしょうか。それは、毒麦を抜き集める時良い麦まで抜いてしまうかもしれないからです。

ところで、イエス様はなぜ弟子たちにこのような喩えをおっしゃったのでしょうか？聖書には詳しい状況が書かれていないので、分かりません。けれども推測することはできます。弟子たちは、「神様が世界を創造なさったにもかかわらず、どうしてこの世の中には悪い者や悪が存在するのか」という疑問を持っていたかもしれません。弟子たちの中には、わけも分からないまま苦しみを経験している人もいたかもしれません。また、ある弟子たちは「神様はなぜ悪をお許しになるのか」という疑問を持っていたかもしれません。そして、イエス様に「悪をなくしましょう」と訴えたようです。ところで、イエス様はこのようにおっしゃいました。

「毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。」(マタイ 13:29)

判断を誤ってしまう場合もあるから、神様に任せなさい、ということです。それでは、イエス様はなぜ判断を神様に任せなさい、とおっしゃったのでしょうか？毒麦は最初は普通の麦と見分けにくいのですが、大きくなれば穂が開き背も高くなり、色も濃くなるから見分けやすくなるそうです。その時に抜き集めれば容易くできる、ということです。判断するのにも適切な時がある、という意味です。

ところで、コロナの状況下にいる私たちも当時の弟子たちと同じ疑問を持つようになりました。

「なぜ神様は悪であるコロナウイルスを許すのか？」

私は普段よりも、より熱心にお祈りしながらこの問いに対する答えを求めようと思いました。おそらく、このような問いは私だけではなく、信仰のある人なら一度くらい、いや、それ以上繰り返して試みたでしょう。それもそのはず、私たちが経験している現実疑問だらけだからです。行動を制限されるような過ちを犯したわけでもないのに、自粛をしなければなりません。死ななければならぬほど大

きな過ちを犯したわけでもないのに、多くの人が死んでいます。企業が倒産し、仕事を失った人々も数えきれません。そのうえ、神様に出会って訴えたいのですが、教会の礼拝さえ自由ではありません。どうしてこのような状況が長く続く必要があるのでしょうか。

人類文明学者、社会学者、環境論者の中には、コロナ・パンデミックが、グローバル化を推進してきた人間の傲慢、天然資源の無分別な乱用と自然破壊などによるものであると言います。そして解決のためには根本的な生活の転換が必要であると言います。納得できることもあります。しかし、慰めにはなりません。

結局、信仰者である私たちは信仰を通して答えを探しかありません。けれども、神学者たちの答えの中にも、理解しがたいものもあります。ある神学者はコロナ・パンデミックが「神様の裁きであり、悔い改めを促すためのものである」と言います。悔い改めのためのものであるとは納得できる場所がありますが、神様の裁きであるとは納得できません。コロナ・パンデミックがグローバル化を推進してきた人間の傲慢、天然資源の破壊に対する裁きであるならば、その過ちに対する責任ある人が裁きを受けなければなりません。けれども、現実を見れば、過ちを犯した者ではなく、高齢者や貧困層などの社会的な弱者が主な犠牲者になっています。それゆえ、コロナが神様の裁きであるという説明には納得できません。

私はこの問いに対する答えのために、最近刊行された英国聖公会の N. T. ライト(Nicholas Thomas Wright)主教の『神様とパンデミック(God and the Pandemic)』という本の内容を短く紹介したいと思います。皆さんにとっては N. T. ライト主教は馴染みがないでしょう。けれども、彼は使徒パウロと初期キリスト教の研究に独歩的な神学者として、英国ダラム教区の主教を歴任し、現在オクスフォード大学で働いています。彼はこの本を通して、「コロナウィルスが神様の裁きであると気早に結論づけず、コロナの原因にも執着しないように」と呼び掛けています。そしてそれより、「信仰者は隣人のために何をすべきかを問う方が良い」と言いました。今は、「苦しんでいる人々と共にその痛みを共感し、共に祈らなければならない時間」であるからです。

実際に多くの信仰者は、この理解しがたい、受け入れがたい不思議な状況に何か明確な答えを求めます。そうしてから漸く安心しようと思います。しかし、考えてみましょう。人生の中で起きる不可解なことは一つ二つでしょうか。もしかしたら、そのような不可解性を受け入れるのが信仰者の人生ではないでしょうか。今日ご一緒に読んだ福音書の「毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい」というみ言葉がまさにこのような疑問をいただく人々のためのみ言葉ではないでしょうか。

今日の知恵書には、特別な告白のみ言葉がこのように記されています。

「すべてに心を配る神はあなた以外におられない。だから、不正な裁きはしなかったと、証言なさる必要はない。…あなたの力は正義の源、あなたは万物を支配することによって、すべてをいとおしむ方とられる。」(知恵 12:13,16)

今、私たちに必要なのはこのような信仰ではないでしょうか。生きていく間、人々にとっては納得しがたいことが絶えず起こります。人間の歴史は、多くの疑問とその疑問に対する答えを探す過程を通して発達してきたのですから、コロナ・パンデミックについても問い、答えを探すことが問題解決の過程であるのかもしれませんが、しかし、答えはなかなかみつかりません。今私たちが経験していることは誰も経験したことがないことだからです。したがって、判断を留保し、すべてをいとおしむ神様

を信じて、今私たちがすべきことを見つけていく、そのことがより重要なことではないでしょうか？

私は先ほど紹介させていただいた N. T. ライト主教の呼びかけのように、今私たちに必要なのは、コロナウイルス感染防止指針をきちんと守り、コロナウイルスと闘っている人々を応援することであると思います。犠牲になった人々の痛みを共感し、彼らのためにお祈りをするることであると思います。そして、何より重要なことは、私たちの人生の与え主である神様を信じ、私たちの判断と人生そのものを神様に委ねながら生きていくという心の構えです。

もちろん私たちがこのような厳しい現実を受け入れるのはとても難しいことであると思います。神様に自分の人生を委ねながら生きていくことは漠然としたもののように感じられます。しかし勇気を出して頑張りましょう。使徒パウロもこのような私たちの心をよく分かって、このように慰めと励ましを言葉で伝えてくれます。今日と一緒に読んだローマ書のみ言葉です。

「現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りない」とわたしは思います。」(ロマ 8:18)

たとえ現実が苦しく重く感じられているとしても、神様と共に試練を乗り越えていけば、その荷はいつそう軽くなるでしょう。そしていよいよ、私たちが受ける恵みは今の苦しみよりもっと大きいものになるでしょう。ですから、このみ言葉に頼り、力を得て、共にこの試練を乗り越えていきましょう。必ず神様は私たちの現実と私たちの心をお分かりになり、大きな恵みをもって祝福してくださるでしょう。

この一週、神様の限りない慈悲に頼り、豊かな恵みの日々になりますようにお祈りいたします。



7月19日の礼拝は、こちらでご覧いただけます。

<https://www.youtube.com/watch?v=m3vnJe8AP58>